

奄美群島の地域活性化に向けた取り組み

勝 眞一郎

要 旨

定住自立圏研究所では、2010 年より研究拠点を奄美群島とし地域活性化モデルの構築に取り組んでいる。2011 年は、群島全体と各自治体の未来づくりというテーマで範囲や対象者を変えてワークショップを行った。結果として、地域に自分たちで未来づくりを行い、更にそれを実行計画にブレークダウンし、実行に移すサイクルが回り始めた。

キーワード：地域活性化，地域モデル，未来づくり，奄美群島

1. あらためて脚光を浴びる地域活性化

1.1 地域が国を支える

東日本大震災の被災地においては、地域の方々が営々と築いてきたものが一瞬のうちに崩れ、津波に流された。事故が発生した原子力発電所の近隣は、人が生活できない立ち入り禁止区域となった。

今、人々は急ピッチで復旧・復興に取り組んでいる。生活再建を行うプロセスを見てみると、やはり地域のつながりが生活の基盤であることがわかる。復旧・復興のプロセスの中で、地域の上に市区町村，その上に都道府県，さらにその上に国という行政単位が重なっていることが改めて浮き彫りになった。

他方、震災の直接の被害を免れた都市においても、震災の経験から地域活動が活発化してきている。特に防災を中心とした取り組みでは、地域における具体的な防災計画の見直しが進んでいる。

高齢化，少子化，過疎化，都市化といった問題により地域コミュニティが各地で崩壊しようとしている中，今回の震災は改めて地域コミュニティの大切さを考え直す機会となった。

日本を元気にするためには，その基盤である地域が活性化していなければならない。地域が国を支えているのだ。

サイバー大学 IT 総合学部・准教授

原稿受付日：2011 年 10 月 12 日

原稿受理日：2012 年 2 月 3 日

1.2 エネルギー問題からみた地域の重要性

今回の震災は、我が国におけるエネルギー問題への取り組みを加速させた。原子力発電依存から自然エネルギー利用への転換。節電。さらにもう一つは地域で電力供給を考えるしくみとしてのスマートグリッドやマイクログリッドの実用化研究である。

従来から各自治体では国の主導の下で「地域新エネルギービジョン」を策定してきた。今後は、地域が主体となってエネルギーをどう発電し、送電・配電するかを具体的に計画し、実現していくことが必要である。従来は電力会社やガス会社が主役であったエネルギー問題において、地域の役割が増してきたと言える。

1.3 定住自立圏研究所の活動

こうした地域活性化の重要性がますます高まる中、定住自立圏研究所では2009年の千葉県の「竹もりの里プロジェクト」を皮切りに、長野県上田市、鹿児島県鹿児島市で地域活性化活動に取り組んでいる。2010年より新たに鹿児島県の奄美群島を活動拠点に追加し、現地在住の研究員を1名増強した。

現在の地域活性化においては「産業の振興」、「人口の増加」、および「人材の育成」が3大テーマである。いずれのテーマにおいても産学官民一体となった取り組みが必要であり、その中のプレーヤーとして、大学に対する支援ニーズは高まっている。

2. 奄美群島における活動

2.1 自治体とのコミュニケーション

奄美群島は、北から奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の5つの島からなっている。自治体としては、1つの市、9つの町、2つの村がある。さらに、奄美群島を一つのエリアとして地域振興を行う奄美群島広域事務組合という組織がある。

2010年は、1年間をかけ、こうした行政機関との関係構築を行った。具体的には、地域が抱えている課題のうち、大学の研究機関として支援ができるテーマをヒアリングするという作業を各自治体の企画部門を訪ね行った。

2.2 国の調査への参加

平成22年度の国土交通省都市・整備局の事業として、「奄美群島におけるICTを活用した雇用機会創出の検討調査」という事業があった。調査においては、以下の4つのテーマが設定された。①ICT関連企業の進出動向調査、②奄美群島内でのICTを活用したビジネスモデルの検討、③人材確保のための方策検討、④雇用創出のための企業誘致・起業支援のための具体的方策の検討である。

このうち定住自立圏研究所では、②奄美群島内でのICTを活用したビジネスモデルの検討と、④雇用創出のための企業誘致・起業支援のための具体的方策の検討に参加した。

まず、②奄美群島内での I C Tを活用したビジネスモデルの検討においては、2011 年 1 月 25 日に、奄美市において、群島の各自治体の企画職、奄美 I C T協議会委員、産業関係者、国土交通省担当官など約 40 名のメンバーによるワークショップを開催し、筆者が全体の進行を行った。(図 1 参照)

あらかじめ、事務局で「観光」「特産品」「大島紬」の 3 テーマを設定し、参加者には事前に S W O T 分析と、現時点における兆し調査をお願いした。当日は、お願いしてあった調査結果の共有をまず行い、それから各分野における「20 年後のありたい姿」と「ありたい姿実現のための未来からみた中長期計画をブレークダウン」していただいた。さらに最後には、具体的なビジネスモデル提案をチームごとに出していただき、発表を行った。

群島内で、島を横断し、官民一体となったワークショップは初めてということで、参加者も 4 時間余りのワークショップを熱心に取り組んでいただいた。

④の雇用創出のための企業誘致・起業支援のための具体的方策の検討においては、2010 年 11 月 22 日から 24 日の 3 日間、東京・神奈川の I T 企業の経営者に同行し、奄美への企業誘致・仕事誘致の検討調査を行った。結果として、一件の仕事誘致が実現している。

また、一緒に調査を受託した機関と共同で、2012 年度以降の企業誘致・起業支援のための群島内での枠組みを検討し、国へと上梓した。群島全体のゴールを数値で定義し、それを実現するための組織と役割の設計を行った。



図 1 奄美群島の関係者を集めたワークショップの様子

2.3 奄美群島 I C T協議会への参画

上述の国交省による調査検討の結果組織された「奄美群島 I C T協議会」は、これまでに 2 回の会を開催した。1 回目は 2011 年 5 月 24 日。会の発足ということで、会則および委員長、副委員長、事務局の選任が行われた。筆者は、学識経験者という立場からオブザーバーとして参加することになった。

2 回目は 2011 年 8 月 31 日に開催され、「I C Tを活用した産業振興部会」「人材育成事業

育成部会」「企業・仕事誘致部会」の三つの部会の設立が決定し、それぞれの部会長が選出された。筆者は、「人材育成事業部会」に所属することになった。

2.4 大島郡瀬戸内町のまちづくりワークショップ「わーきゃシマ未来像検討会」

瀬戸内町は、2011年1月の奄美市で行った未来づくりのワークショップに興味を持ち、町の未来づくりのワークショップを「わーきゃシマ未来像検討会」と名付けて開催している。「わーきゃシマ」とは「私たちの地域」という意味である。町長が町民参加型の行政を行いたいという意向をお持ちであり、開催の運びになった。

1回目と2回目は、企画課のメンバーに運営のポイントをお伝えして自主運営していただいた。3回目の2011年9月30日には、私が講師を担当し、未来マップの作成を行った。参加者は、役場職員、民間企業を含め約20名であった。会では、廃校を活用した町への集客、商店街の活性化、町の情報発信の3つのチームに分かれて計画書づくりを行った。最後の各チームの計画書発表の後、全員に自分が明日実施する宿題を宣言していただいた。



図2 瀬戸内町「第3回 わーきゃシマ未来像検討会」の様子

2.5 地域の未来を担う若手の発掘—「アマミノミライ」

全国各地で地域活性化に取り組むメンバーと意見交換を行う中で、作成する地域の未来像作りに関する課題が出てきた。地域の未来像作りを行政が仕掛けると、どうしても年配のベテランに声をかけることになり、新しい未来像が出てこないというのだ。有益な経験がかえって邪魔をする可能性もある。

そこで、定住自立圏研究所では、実験的に奄美で40歳以下の若者に集まっていただき、奄美の未来を自分たちで語るワークショップを開催することとした。東京とも会場の模様をインターネット（Ustream）でつなぎ、東京の若者の意見も吸い上げることとした。

当日は、奄美の会場に20名、東京会場に10名が集まり、3時間にわたる激論を繰り広げた。地域を愛する地元の若者は課題認識もしっかりしており、今後もこのようなワークショップを開催し、行政につないでいくことが必要であることが分かった。会場でのアン

ケートにおいても、今回のようなワークショップを通じて、自分たちの町づくりを手掛けていきたいという抱負が多くみられた。今後も継続し、ある時点で地元の若者主催の会に引き継いでいきたいと考えている。(図3, 図4 参照)

自分たちの未来を自分たちで描くワークショップ

第1回 アマミノミライ

これからの奄美の未来をにう私たち自身が、奄美の未来を語り、
奄美の未来を設計する。
奄美の未来を描いていくためのワークショップを40歳以下の
アンター40 U-40 世代が考えてみる

1. 日時
2011年 10月 9日(日) 14:00-17:00 (Ustream による中継あり)
*ワークショップ後、奄美会場では懇親会を行います。(17:30-20:00) 飲食代は各自実費です。

2. 場所
メイン会場: ASIVI (鹿児島県 奄美市 名瀬金久町4-3) tel. 0997-53-2223
東京サテライト会場: TRAVEL CAFE BLISS (東京都 目黒区 青葉台1丁目17-2) tel. 03-6416-1178
<http://www.bliss2001.com/cafe.html>

3. テーマ
パネラーの皆さんと問会場を交えて意見交換を行います。
①奄美の現状認識
②奄美のいいところと課題
③ありたい姿を描いてみよう
④具体的に動いてみよう

4. パネルディスカッション
パネラー 川畑 裕徳さん(川畑興産店)
(50音順) 迫田 真吾さん(アビコム)
田町 まさよさん(奄美ガイド)
藤 憲吾さん(あまみFM)
別府 美加代さん(袖んちの会)
司会 勝 真一郎(サイバー大学 IT総合学部 准教授)
佐藤 理江(メッツ研究所)

5. 参加者
40歳以下の奄美群島在住の方。
参加無料。(但し、会場が満席の場合は入場をお断りする場合があります。ご了承ください。)

 サイバー大学
Cyber University

主催:サイバー大学 定住自立圏研究所
後援:メッツ研究所・薩摩経済新聞社・あまみFM

図3 「アマミノミライ」パンフレット



図4 ワークショップ「第1回 アマミノミライ」の様子

3. 今後の活動計画

上述の活動のほかに、定住自立圏研究所では総務省が立ち上げた「地域実践活動に関する大学教員ネットワーク」⁽¹⁾に参加し、これまでの地域実践事例を学んでいる。さらに、離島の地域活性化に詳しい株式会社メッツ研究所や離島経済新聞社と連携し、新しい地域モデルの構築に向けて活動を行っている。

2012 年は、奄美では具体的な成功事例を生み出していきたいと考えている。奄美群島でも Facebook や Skype の利用が浸透し、都市部からの支援も行いやすくなってきており、さらに活動が活性化することを期待している。

注および引用文献

- (1) 総務省「地域実践活動に関する大学教員ネットワーク」

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/kyoin_network/index.html

(2011 年 10 月 15 日確認)

An effort to local revitalization at Amami islands

Shinichiro Katsu

Abstract

The institute for Self-sustained Area of Cyber University is focused on Amami islands area for its research field from 2010 . In 2011 , the institute for Self-sustained Area set up some workshop discussions for plotting the future of Amami islands and its local government. As a result, they stride ahead for their strategy for the future by themselves.

Keywords: Local Revitalization, Regional Model, Strategy for the Future, Amami islands